

漱石『夢十夜』の夢体験とイメージ系列の特徴

— 主人公の姿勢、登場人物、モチーフの展開から —

名 取 琢 自

夏目漱石が明治41年7月25日から8月5日にかけて朝日新聞に連載した『夢十夜』は夢日記形式の連作短編小説であるが、漱石が実際に見た夢なのか、全くの創作なのか、また個々の夢が何を意味しているのかなど、多くの謎が残されており、研究者や読者の興味を惹きつけてきた。しかも執筆時期は『虞美人草』と『三四郎』の間であり、漱石作品の展開を考察する上でも興味深い作品である。

『夢十夜』をめぐり、文学批評の分野では多数の論考が積み重ねられている。江藤淳(1974/1979)は『夢十夜』を漱石の「内部世界のどろりとした触感を露わにし」た「裏切られた期待」のモチーフが表現されたものとして注目している。

作品中の夢の相互関係については、石井和夫(1993)が『夢十夜』全体を俯瞰して、第五夜、第六夜を中心とし、第一夜、第十夜を外周とする同心円状の構造をなしていることを指摘した。氏の論考は共通の同心円上にある一対の夢の共通点や対比を重視しているが、夢系列全体の布置を見抜く試みとして示唆に富んでいる。柴田勝二(2003)は夢の奇数章には「〈死〉の主題」が強く、偶数章は「一つの行為に持続的に集中する人間」が登場するという質の違いを指摘している。

『夢十夜』において重要な意義をもつ「時間」に関しても考察が重ねられている。中原豊(1991)は禅の時間体験を参照しつつ、『夢十夜』

における「百年」には、過去・現在・未来を直線的につなぐ日常的な時間とは質的に異なる、「無時というほかのない時間」が描かれているとして、「同じ行為のあくなき繰り返し」がなされる時間に注目し、「直線的時間の非可逆的な進行と円環的時間の限りない循環」という2つの性質の時間を見出し、空間的には螺旋をなす時間感覚だとしている。

『夢十夜』を精神分析の視点から読み解く試みも続けられており(例えば山中,2006ほか)、またユング心理学の視点から『夢十夜』を漱石の病跡学に迫る論考もなされている(三好,2009)。この他多数の研究があり、その多くは自然なことではあるが、『夢十夜』を漱石の他の作品(『永日小品』など)や漱石の生育史など、外側の資料と対応づけて解読しようとする方法をとっている。

臨床心理学の観点から『夢十夜』を取り上げる利点はいくつかある。漱石が日本と西洋双方の文化を経験した上で、近代的な自我を働かせ得る人物であったこと、自己観察や文章描写の能力が極めて高い人物による記録であることに加え、漱石がフロイトやユングの夢心理学の影響をそれほど強く受けていない時代に生きていた人物である点大きい。東北大学の漱石文庫目録(東北大学,2010)によれば、少なくとも漱石の蔵書としてはウィリアム・ジェームズやザント、ハブロック・エリスの著書はあるが、フロイトやユングの著作は残っていない。

筆者は2009年、2010年の2年間にわたり、スイス・チューリヒユング研究所の夏期集中プログラムにおいてユング派分析家 Ursula Weiss 氏とともに、東洋と西洋の夢やおとぎ話の比較を行うセミナーを担当し、『夢十夜』を題材として参加者と夢を味わい、連想を語るワークを行ってきた。西洋の参加者からは、夢の美しさへの感動が語られる一方で、夢の主人公の男性が自ら主体的に動いていないのではないか、という指摘もなされ、東西の感じ方の違いが垣間見えて興味深かった。特に、参加者に漱石に対する先入見がほとんどなく、一個人の夢テキストとして純粹に取り組めた点がよかったように思っている。

そこで本稿では、『夢十夜』を敢えて一人の夢見手による夢記録と想定して、一連の夢系列におけるイメージの展開の特徴とそれぞれの夢体験に特徴的な様式を見出し、深層心理学的な検討を加えたい。方法論としては、夢のイメージを既存のコンプレクス概念や固定した意味と対応させるような還元的方向をとらず、漱石の生活史や他の作品との対応付けも差し控え、あくまで『夢十夜』に記された夢内容と内的論理から読み取れる範囲に限定して検討を進めることとする。

1. 夢の最終場面と各夜の特徴

夢を想起する行為は必然的に過去に属する夢体験を振り返る作業になる。そのため夢見の主観的体験とその想起との時間順序は、夢の時間進行の通りではなく、目覚めた瞬間に印象的な場面が断片的に思い出され、それら断片をたよりに再び夢の始めから終わりまで時間順序にそって記憶を配列し直す作業になることが多い。これは夢に限ったことではなく、心理臨床の面接記録を書く場合も、夢見の場合ほどには

意識水準が低下していないという違いはあるが、夢の想起と共通点は多い。

そこでまず、夢テキストで最も注目すべきポイントとして、「覚醒した瞬間の印象や情動」、「夢の中で表現されたり体験されている欲望」、「夢の初めの場面からどのようにイメージが展開し、夢のなかの主体がそれに取り組んでいったか」に注目したい。また『夢十夜』に特徴的な要素として、夢のストーリーのなかで「すでに決まっていること」と「繰り返される動き・作業」がある。各夜の夢をこれらの視点から整理してみると、表1のようになる。全体として、欲望されていることが、既に決まっていることを背負いながら、繰り返される動きや作業を通して苦闘しつつも、江藤のいう「裏切られた期待」という結末に至るパターンがほぼ共通に描かれている。夢の最終場面は、第五夜を唯一の例外として、それまでのストーリーを完了形で締めくくっている。

では表1にしたがって夢の最後の場面に着目しながら、第一夜から第十夜まで、夢見手の視点である〈自分〉が夢の諸要素とどのように取り組んでいるかを概観する。

第一夜の結末：「百年はもう来ていたんだな」とこの時始めて気が付いた。

最初の場面では〈女〉が仰向きに横たわり、静かな声で「もう死にます」というのを〈自分〉が覗き込んでいる。〈自分〉は〈女〉が死ぬのが本当か、不思議に思い、何度も念を押す。女は「百年待っていて下さい」と言い、〈自分〉がそう約束すると、〈女〉は「もう死んでいた」状態になる。〈自分〉は庭へ下りて〈女〉を土に埋め、約束通り待つことにする。日が昇っては沈む繰り返しのなかに身を置いた〈自分〉が〈女〉の約束を疑った瞬間、石から青い茎が伸びてきて、真っ白な百合が花開く。遥か上から露が落ち、花が揺れる。〈自分〉は百合に接吻

表1 『夢十夜』 夢の諸要素と展開

夢	登場人物・要素	欲望	すでに決まっていること	繰り返される動き・作業	結末	夢イメージの展開
第一夜	自分 女 (真珠貝・太陽・月・百合・露・暁の星)	女と再会したい	女が死ぬ・百年待つ約束	日の出と日没。座って待つ	「百年はもう来ていたんだな」とこの始めで気が付いた。	夢イメージの展開 女「死にます」-埋葬-百年待つ-疑い-百合の花と再会
第二夜	自分 和尚 (海中文殊短刀 時計)	悟りたい/和尚を殺したい	悟って和尚を殺すか自分が死ぬかの二者択一。時間制限	公案との苦闘	はっと思った。右の手をすぐ短刀に掛けた。時計が二つ目をチェーンと打った。	刃物-悟るか死か-悟って和尚を殺したい-時計が鳴る
第三夜	自分 息子 (杉の根) 盲人	重荷から自由になりたい	息子を背負わねばならない・過去の因果を引き受けねばならない。自分が息子を殺した。	息子を背負って歩く	おれは人殺であったんだと始めて気が附いた途端に、背中の子が急に石地蔵の様に重くなった。	盲目の息子を背負う-先行不明-不穏な会話-百年前の殺人-地蔵の重さ
第四夜	自分 爺さん 神さん 子どもたち (蛇)	手ぬぐいが蛇になるのを見たい	爺さんが見せてくれるまで見られない。	「いまに蛇になる」・川岸で待つ	自分が爺さんが向岸へ上がった時に、蛇を見せるだろうと思って、蘆の鳴る所に立って、たつた一人何時迄も待っていた。けれども爺さんは、とうとう上がって来なかった。	謎の爺さん-問答-「今に蛇になる」-見物-爺さんは河に消える
第五夜	自分 大将 女 白馬 天探女 石	死ぬ前に女に会いたい	虜になった自分。命は敵次第。女は騙されて転落。	恋人が馬で駆けつける。待つ。蹄の痕。天探女を敵とする。	蹄の跡はいまだに岩の上に残っている。砲の鳴く真似をしたものは天探女である。この蹄の痕の岩に刻みつけられている間、天探女は自分の敵である。	捕虜-緑風か死か-死を選ぶ-女を待つ-白馬を駆る女-天探女が時をだます-岩に蹄の跡-女は崖から転落-天探女への恨み
第六夜	自分 運慶 見物人 若い男 (仁王・木)	仁王を彫り出した	不明瞭 (運慶が仁王を彫り出す)	木を探す。仁王を彫り出そうとする。	遂に明治の木には到底仁王は埋まっていないものだと思つた。それで運慶が今日まで生きている理由も略解つた。	運慶の彫刻-埋もれた像-自分も彫りたい-木に仁王はいなかった
第七夜	自分 船員 泣く女 天文学の異人 女 唄う男 (船・太陽・ピアン)	船の行くところを知りたい 孤独感から自由になりたい	船でどこかに行く途中。飛び降りてしまひ、引き返せない。	日の出と日没。エンジン。落下し続ける。	自分は何処へ行くんだが判らない船でも、やっぱり乗っている方がよかつたと始めて悟りながら、しかもその悟りを利用して出る来ずに、無限の後悔と恐怖とを抱いて黒い波の方へ静かに落ちて行つた。	船の行き先を尋ねる-船員が囁す-泣く女-天文学の男-楽しむ男女-孤独感-飛び降りる-後悔と恐怖
第八夜	自分 床屋 庄太郎 豆腐屋 芸者 人力車 眼鏡格子の女 金魚売 (鉄・鏡)	髭と頭が「ものになる」こと 栗餅屋の様子が見たい	床屋の椅子に座っていない 栗餅屋の菓子に座っていない	札を数える。鉄。鏡を覗く。金魚売を見る。	自分はしばらく立ってこの金魚売を眺めて居た。けれども自分が眺めている間、金魚売はちつとも動かなかつた。	床屋に委ねる-庄助が見える-栗餅屋の様子が見たい-百枚数える女-金魚売は動かない
第九夜	自分 若い母 浪士 自分の母 (親馬・足軽共)	若い母：夫の無事な帰還	父が不在。殺されている。	お百度。母を待つ。母の話を聞く。	こう云う風に、幾晩となく母が氣を揉んで、夜の目も寝ずに心配していた父は、とくの昔に浪士の為めに殺されていたのである。/こんな悲しい話を、夢の中で母から聞いた。	父の不在-母のお百度-父はとうに浪士が被害-母から話を聞く
第十夜	自分 健さん 往來の女 若い母 水菓子 (水菓子 隊)	庄太郎：きれいなものを見たい 無事に帰りたい 健さん：パナマ帽がほしい	庄太郎は溺死。飛び降りなければ隊に舐められる。パナマ帽は生者に引き継がれる。	水菓子や女を品評する。隊を叩き落とす。舐められまいと苦闘する。	庄太郎は助かるまい。パナマは健さんのものだろう。	庄太郎溺死-庄太郎の娯楽-水菓子-女に同伴-飛び降りるか隊になめられるか-ステッキで叩く-力尽きる-「庄太郎は助かるまい」

して顔を上げると暁の星が一つ瞬いていた。このとき「百年はもう来ていたんだな」とわかる。

第一夜の〈自分〉は受け身であり、〈女〉がやがて死ぬことも、百年待つことも、百合に化身した〈女〉との再会も、〈自分〉の意図とは関係なく既に決まっていることとして進行する。唯一、〈自分〉の意識が主体的に動いたのは〈女〉との約束を疑った瞬間であり、それが「百年が来ていた」とわかる変化を導いている。繰り返される日の出と日の没の間、〈自分〉はただ座って時の運行を眺めているだけである。この繰り返しの時間は、表面的には何も変化のない時間であり、次々と事象が推移し進展する直線的な時間とは質的に異なる、いわば「無」の時間ともいえる時間である。そのなかで疑ってみる意識が動いたとき、はじめて、〈自分〉は質の違う時間へと移行できた。最後の時点からさかのぼれば、百合の花との接吻の瞬間、過去が意識された、ということになる。

第二夜の結末：はっと思った。右の手をすぐ短刀に掛けた。時計が二つ目をチーンと打った。

〈自分〉はひとり部屋に座り、座布団の下に「ちゃんとあった」のを確認して安心する。後に読者にはそれが「短刀」だったとわかる。夢の〈自分〉は過去を振り返っている。悟れない自分を馬鹿にした〈和尚〉への激しい反感とともに、悟れなければ死ぬ、悟れば〈和尚〉を殺す、の二者択一の状況に自分を追い込み、悟りを求めてひたすら内圧を上げて苦悶する。このもがき続ける時間は、第一夜の日の出、日没の繰り返しの時間と同じく、密度の濃い「無」の時間である。最後に、時計が一度、また一度鳴り、質の異なる時間、すなわち、おそらくは〈和尚〉との対面（または悟れなかった自分を認めての自害）に向かう切羽詰まった時間へと移行することが暗示される。

第二夜の〈自分〉は一見主体的にもがいて

いるように見えるのだが、実は〈和尚〉にかけられた言葉通りに動かされて、自分を身動きできない状況に追い込んでいるのだから、受動的ともいえる。なぜ悟らなければならないのかを疑ったり、笑ったりする境地は選択肢にない。この受け身性は、切っ先を凝視する〈自分〉を、短刀が追い詰めていく、短刀の刀身の描写にもよく現れている。

第三夜の結末：おれは人殺（ひとごろし）であったんだと始めて気が附いた途端に、背中の子が急に石地蔵の様に重くなった。

この夢は、背中に負ぶった〈子供（小僧）〉に導かれて、百年前に盲人を殺した場所に辿り着き、殺害の記憶を想起する内容である。ここでも〈自分〉は状況の中、受け身でもあるといえるが、その一方で、早くこの面倒な存在から自由になりたい、という気持ちもまた強い。この夢での「繰り返し」要素は、雨の中、不気味な小僧という重荷を背負いながら、目的地の杉の根に至るまで、田んぼのあぜ道を抜けて森の中へと急ぐ時間である。

第四夜の結末：自分は爺さんが向岸へ上がった時に、蛇を見せるだろうと思って、蘆の鳴る所に立って、たった一人何時間も待っていた。けれども爺さんは、とうとう上がって来なかった。

この夢は不思議な力を持つ〈爺さん〉が手ぬぐいを蛇に変える術を子どもたちに見せようと言うのだが、なかなか変身しないまま、〈爺さん〉がひとり川の水面に入って行って消えてしまうという内容であり、作者は子どもとしてこの場面に立ち会い、空しく待ち続けていた、という結末になっている。「今に見せてやる」という〈爺さん〉に期待しながら注目しつづけるのが「繰り返し」要素で、子どもである〈自分〉は術の実現を期待しながら受け身で待ち続けている。

第五夜の結末：蹄の跡はいまだに岩の上に残っている。鶏の鳴く真似をしたものは天探女

である。この蹄の痕の岩に刻みつけられている間、天探女は自分の敵である。

この夢では、古代の武人である〈自分〉が、敵に捕まり、命乞いをするか、名誉の死を選択するかの二者択一の後、死を選んだものの、最後に「一目思う女に逢いたい」と願い、夜明けまで待つことを許される。後半は場面が転換し、その〈女〉が白い馬を駆ってかけつけようとするが、〈天探女〉に夜明けだと騙されて岩に乗り上げ、深い淵へと転落してしまう。「繰り返し」要素としては、緊張状態下での動作の反復という意味で、〈女〉が馬を失踪させる場面が該当する。〈自分〉は名誉の死を選ぶ時には主体的に動いているものの、これも含めて、外的に用意された状況に素直に従う(逃げたり、闘ったりはしない)点ではやはり受け身の状態であり続けている。〈天探女〉のトリックである鶏の声が二度響き渡る点は、第二夜(時計)、第三夜(鷺)と共通している。

第六夜の結末：遂に明治の木には到底仁王は埋まっていないものと悟った。それで運慶が今日まで生きている理由も略解した。

この夢も前・後半に分かれており、前半は仁王像を刻む(運慶)を見物人が批評している場面、後半は材木から仁王を救い出すように彫ればよい、という極意を〈若い男〉に聞いた〈自分〉も仁王を彫り出そうとして、薪の木を次から次へと探すが、どこにも仁王は埋まっていなかった、という内容である。木を探す場面が「繰り返し」要素である。〈自分〉は積極的に仁王を探索しているが、努力は報われず、発見できない。〈若い男〉の言うとおりに彫り出そうとする点では受け身的ではあるが、自ら彫ろうと行動している点では、ここまでの夢よりも積極的に事態に取り組んでいる。

第七夜の結末：自分は何処へ行くんだか判らない船でも、やっぱり乗っている方がよかった

と始めて悟りながら、しかもその悟りを利用する事が出来ずに、無限の後悔と恐怖とを抱いて黒い波の方へ静かに落ちて行った。

この夢では大きな汽船に乗った〈自分〉が船の行方を不安に思い、〈船員〉に尋ねるが誠実な答えを聞けないまま、船中をさまよい、〈泣く女〉を見かけ、天文学を尋ねる〈異人〉と出会う。彼らと深く関わることもなく、さまよいつづける〈自分〉はピアノを弾く〈派手な女〉と〈唄う男〉のカップルを遠目で見て、「益々つまらなく」なって死ぬ事を決心し、船から身投げする。しかし黒い波へと落下しながら激しく後悔し、恐怖を味わう。

第七夜は他の夢よりも明確に〈自分〉が主体的に動いている点が大きく異なっている。「繰り返し」要素は、日の出と日没(第一夜と類似)、日没に向かう船、その運行を擲捨するような、あるいは〈自分〉の問いかけを茶化するような〈船員〉の囁き歌(「西へ行く日の、果は東か、それは本真か。東出る日の、御里は西か。それも本真か。身は波の上。楫(かじ)枕。流せ流せ」)であり、さらに、黒い波に向かって〈自分〉が落下し続ける時間である。この夢で〈自分〉は状況が要請する「仕事」をただ受け身にこなすのではなく、自らのアンニュイな不全感に直面しつつ、投身という行為に挑んでいる。こうした積極的な行動とそれに続く後悔の念と恐怖は、夢自我の側からの深刻なコミットメントを示しており、第七夜の大きな特色となっている。

第八夜の結末：自分はしばらく立ってこの金魚売を眺めて居た。けれども自分が眺めている間、金魚売はちっとも動かなかった。

続く第八夜から第十夜は夢や出来事を外から見る枠構造を取っている。第八夜は第十夜へと登場人物が持ち越され、連続性を示す点にも特色がある。

第八夜では、床屋に入った〈自分〉が椅子

にすわって施術されながら、鏡に写る人々を覗こうとする。窓の外を通る〈庄太郎〉と〈連れの女〉、〈豆腐屋〉、〈御化粧をしていない芸者〉。そこで床屋の〈白い男〉が「旦那は表の金魚売をご覧なすったか」と聞く。「危ねえ」の声を聞き、自転車と〈人力車〉を垣間見、〈栗餅屋〉の呼び声。帳場格子には懸命に札を数える〈女〉がいる。札はいつまで勘定しても百枚。外には桶の金魚を前にした金魚売りがいたが、〈自分〉が見ている間、金魚売りは「動かなかった」。やはり空しい結末である。「繰り返し」要素は、〈帳場格子の女〉が札を数え続ける動き、床屋の鋏、そして〈金魚売〉を凝視する時間にある。〈自分〉は身動きできないながらも視線はできうるかぎり積極的に、関心のあるものを見ようともがいている。

第九夜の結末：こう云う風に、幾晩となく母が気を揉んで、夜の目も寝ずに心配していた父は、とくの昔に浪士の為に殺されていたのである。／こんな悲しい話を、夢の中で母から聞(きい)た。

この夢は、夫の無事を祈りお百度を踏む〈若い母〉の傍らで、ひもで結わえられた状態で待っている〈子供〉を〈自分〉が見ているかのように描写され、最後に〈夫(父)〉はもう殺害されていた、ということを含めて、「母から聞(きい)た」という枠物語構成をとっている。「繰り返し」要素は、前半で〈若い母〉と〈子供〉が「父様は」「あっち」「何日御帰り」「今に」とやりとりする場面、〈若い母〉の踏むお百度である。〈若い母〉と〈子供〉の結末は語られないまま、視点が一つ外へ移行して、話全体を母から聞いたとして終わる。〈若い母〉と〈子供〉の話「見る」〈自分〉は物語そのものには参加していないものの、物語を描写する文体に〈自分〉の思いがにじみ出ている。

第十夜の結末：庄太郎は助かるまい。パナマ

は健さんのものだろう。

第十夜も枠構造を取っているが、第九夜と異なり、〈自分〉は完全に外から見ているのではなく、夢のストーリーに参加してはいる。

第八夜にも登場した〈庄太郎〉を中心に据えて、彼の不思議な体験を追体験するように振り返った後で、それを聞いた〈自分〉が「助かるまい」と表明して終わる。

〈庄太郎〉は好男子で通っていたが、水菓子屋の果物を眺めて品評したり、〈往來の女〉を眺める趣味があった。あるとき、〈身分のあるらしい立派な服装の女〉が一番大きい籠の果物を買って、「ずいぶん重いこと」と言ったのを受けて、〈庄太郎〉が運びましょと〈女〉について行く。〈女〉は電車に乗り、草原に到着するが、「もし思い切って飛び込まなければ、豚に舐められますが好う御座んすか」と絶壁から飛び降りるように迫る。〈庄太郎〉は辞退する。命を惜しんで死を回避するのは、第五夜の〈自分〉とは逆の選択である。〈庄太郎〉は際限なく押し寄せる〈豚〉の鼻面をステッキで叩いては、崖から落下させるが、七日目に疲労困憊して〈豚〉に舐められ、倒れてしまい、町に返される。この庄太郎の受難を物語るのが〈健さん〉である。〈健さん〉は世慣れた先輩という風だが、〈庄太郎〉が亡くなったら彼愛用のパナマ帽子をもらい受けたいと望んでいる。

この夢は第七夜を裏返しにしたような内容でもある。第七夜の〈自分〉がつまらないから飛び降りてしまって後悔する、というのとは対照的に、飛び降りることを辞退したがゆえに、無限の自衛行動を強いられている。「繰り返し」要素は、往來の女性を品定めする行為、女の要求の辞退、そして豚をステッキで払いのける連鎖である。

〈庄太郎〉を劇中劇の主人公とみなせば、往來の女性を眺める行為はやはり受け身の範疇に

入れた方がよさそうであり、〈女〉の果物籠を運んでやるのは、積極的な要素が皆無とはいえないものの、状況にに応じているだけ、という点からすれば受け身に留まっている。ステッキで豚を追い払うのも同様に、逃げ切れずにせざるを得なくなった、受け身の仕事といえよう。また粹物語の一つ外側に出るなら、第二の主人公は〈自分〉であるが、〈自分〉もは健さんから話を聞いているだけなので、受け身であるといわざるをえない。

2. 「男性－女性」軸と「上位－下位」軸からみたイメージの展開

第一夜から第十夜まで、結末に注目しつつ、「繰り返し」の要素と夢の中の〈自分〉の積極性／受け身性に注目しながら振り返ってみた。ここでは、各夜の夢系列の展開を、「男性－女性」軸と「上位－下位」軸による平面上に位置づけて検討する。

『夢十夜』において、男性と女性の関係が重要なモチーフであることは明らかであり、「男性－女性」軸が登場人物と〈自分〉との人間関係を位置づける基本軸として有効であると考えられる。もう一つの「上位－下位」軸とは、夢の登場人物が美、プライド、知性、悟り、イメージとしての分化の度合いからみて、肯定的で、より洗練され、鮮明なイメージとして際だっていれば「上位」、その反対に、否定的な意味合いをもち、より原初的だったり、不明瞭なイメージであれば「下位」とする方向に設定する。これらの諸特性を個別に評定する作業もありうるが、必要以上に煩雑になるので、総合的に「上位」「下位」とおおまかに分類することで、登場人物の相対的な位置を把握しやすくするねらいがある。

(1) 第一夜～第五夜の展開

第一夜の主要テーマは、死にゆく女性の看取りと再会を期して待ち続けることである。この〈女〉は人間らしからぬ要素（真っ黒な目、未来を見通している知性、など）を有しており、〈女〉の化身のような百合の花が再生する過程で、星のかけら、真珠貝、月光、天からの滴、暁の星などが描かれ、天体や人間を超越した世界とのつながりが暗示される。崇高で神秘的な女性像として鮮明に描写されているので「上位」とする。

第二夜の〈和尚〉は苦々しい存在ながらも、悟ったか悟っていないかを判断できる「智」を有しており、「上位」の男性像である。第二夜の夢で悟りを目指して〈自分〉がエネルギーを投入して煩悶するため、自分への熱中、という要素も無視できない。

第三夜に登場する〈子供（小僧）〉は子どもらしからぬ訳知り顔の不気味な存在である。鏡のように〈自分〉を追い詰める「智」という点では「上位」ともいえるが、まだ子どもであり、盲目、負ぶさっていて、自力では歩けない、といった点を考慮して「下位」のイメージとする。

第四夜では、女性として〈神さん〉が一人登場するが、それほど重要な人物とはいえない。主要人物は術使いの〈爺さん〉である。この〈爺さん〉は術の力、悟っているかのような言動、川の中に入っていける力を考慮して、「上位」と位置づける。

第五夜には、〈自分〉の他に、敵の〈大将〉と一目会いたい〈女〉が登場する。〈大将〉は風格があり、兵士を束ねる社会的地位にあり、〈自分〉とも意思疎通を行えることから、「上位」の男性像とする。〈女〉は自分で白い馬を駆ってかけつける行動力、〈自分〉との肯定的な関係から、「上位」の女性像、としておく。石井（1993）はこの女が結果的に崖から落ちてしま

うので〈地〉の女としているが、〈自分〉が一目会いたいと待ち焦がれる対象であり、美しさと行動力を兼ね備えているためここでは「上位」とした。〈天探女〉という、姿をあらわさない存在もいる。ひとまず女性とし、悪意のあるトリックをしかける陰の存在という意味で「下位」に位置づけた。

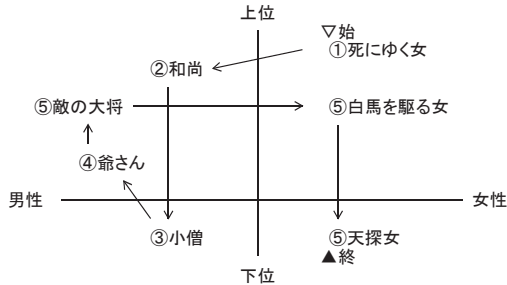


図1 第一夜～第五夜の主な登場人物の展開 (数字は夢の番号)

第一夜から第五夜までの主な登場人物を登場順に「男性-女性」軸、「上位-下位」軸の平面上に図示したのが図1である。美しく死にゆくスピリチュアルな〈女〉(第一夜)から、〈自分〉の悟りを見極める男性(憎々しい面もあるので一段下にある)を経て、背中中の〈小僧〉(第三夜)という下位の男性像に降りていく。そこから再び、術師の〈爺さん〉(第四夜)が現れ、術を成功させないまま川に沈む。第五夜では、古代の〈大将〉の捕虜になり、生か死かの決断(第二夜の和尚との対決を彷彿とさせる)の後、第一夜の女に通ずる〈女〉が白馬で駆けつけようとするが、天探女の罠にかかってしまう。

女を崖から転落せしめた〈天探女〉は、第一夜の〈女〉を死に至らしめ、第九夜の〈父〉を〈浪士〉に殺さしめ、また第十夜で〈庄太郎〉を瀕死に追いやった〈女〉とも同根の、愛する対象との死別という否定的な作用をもたらす心的要素を反映していると考えられる。

(2) 第六夜～第七夜の展開

第六夜は過去の英知、行動力、美的感性を代表する〈運慶〉という英雄的男性像がなぜか現代に現れ、男性的な力が神格化された仁王を彫り出す。〈見物人〉は運慶の技を賞賛するが、自ら運慶の仕事を引き継ぐ意気はなく、やや「下位」の男性像とみなせる。〈運慶〉の創造の秘密を言い当てた〈若い男〉は洞察力から少しだけ「上位」に位置する。

第七夜はここまでの他の夢よりも〈自分〉の意識が詳しく描写されている。登場人物には、〈船員〉、〈泣く女〉、〈天文学の異人〉、西洋人の〈派手な女〉と〈唄う男〉のカップルがいる。〈自分〉が進行方向を尋ねた船員は、意味ありげな歌で質問をはぐらかす。〈船員〉は運航の技術や知恵を備えていて、このような囃して質問をかわすトリッキーなユーモアをもっているのやや「上位」としておく。〈泣く女〉は一瞬見られただけであるが、この女のおかげで〈自分〉の孤独感には和らいでいる。〈天文学の異人〉は専門知識を持っているだけでなく、〈自分〉に「神を信仰するか」と問いかけてくる。この二人はやや「上位」とする。〈派手な女〉と〈唄う男〉のカップルは二人の世界にこもっており、〈自分〉とは距離が遠く関係も希薄である。こちらは先の男女より少し下方に位置すると見るのが妥当であろう。第七夜は〈自分〉への集中度が高く、登場人物と特に濃密な関係が生じてはいない。

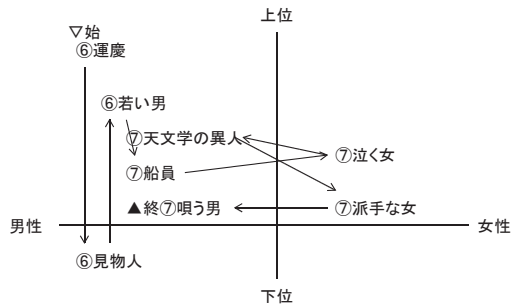


図2 第六夜～第七夜の登場人物の展開 (数字は夢の番号)

第六夜から第七夜までの登場人物の展開を図2に示した。第四夜と第五夜には男女複数の人物像が登場していたが、第六夜は男性だけの単純な構造に収斂している。

これはユングがアイオーン（1951/1990）で述べた、元型的なイメージとしての主要要素が四つの下位要素に分かれて表現され、また一つの要素へと収斂つつ螺旋状に展開していく運動の図式（野田訳，p.287，図18）にも似ている。この図式はユングはグノーシス派の文献において象徴的に表現されている「自己」（セルフ）の様相として描いたものだが、フォン・フランツはこの図式を解説するさい、ここで描かれている、一つの統合された状態から、四つの下位要素個々の取り組みを経て、次の段階の統合へと至るプロセスを、個人の心の発達過程にもあてはまることを指摘している。（Hannah & von Franz, 2004, p.165）

ここまで、第一夜（上位の女との別れと再会）、第二夜（やや上位の超自我的男性との対決の準備）、第三夜（下位の男性に犯した罪を背負う自覚）、第四夜（再び上位の男性の超越的な力への期待と失望）を通して、重要な基本要素とひとつずつ順番に向き合ってきた後で、第五夜にて上位の男性（大将）、上位の女性（女）、下位の女性あるいは中性的存在（天探女）という三点をひとつの夢の物語に配置したことで、一段階目の意識化もしくは統合的視点が得られた結果、ひとつの節目を迎え、次のモチーフに向けて夢が大きく転回したようにも見える。

さらに第七夜は夢の系列全体において、とても大きな転回点となっている。〈自分〉の孤独感、つまらなさ感情が高まり、とうとう船から投身する。〈自分〉が意図的に身投げするのはこの第七夜だけである。第二夜の悟りか死かの内圧の高まりをいよいよ行動に移したかのような。夢見手が最も主体的に、コミットして動

ている点で特に注目に値する。この第七夜を経て、夢のパースペクティブは大きく変化していく。

(3) 第八夜の展開

第八夜も〈自分〉の意識は鮮明であるが、どこか覚めてもいて、第二夜や第七夜ほどには熱中していない。登場人物は〈白い男〉（床屋）、〈庄太郎〉、庄太郎の〈連れの人〉、〈御化粧をしていない芸者〉、〈豆腐屋〉、〈粟餅屋〉、〈人力車〉（の男）、〈帳場格子の女〉、〈金魚売〉がいる。床屋は専門技術を持っているが神秘的な存在とまではいかない。〈庄太郎〉は一通行人の扱いであるが、さほど否定的な面は描かれていない。〈人力車〉は「危ねえ」と自転車と事故を起こしているのでやや「下位」として、〈豆腐屋〉と〈粟餅屋〉はそれよりも少し上の「下位」、〈金魚売〉には何か特別な力が備わっているかのように描かれているため、少しだけ上に位置づけた。〈芸者〉と札を数える〈帳場格子の女〉は女性の陰の部分、もしくは生活に密着した現実感のある面が出ているので、「下位」の女性像としておく。

第八夜以降、夢見手である〈自分〉は一步下がったところから観察者として夢の世界を見ており、登場人物たちのほうが生き生きと動き始める。第八夜から〈庄太郎〉が登場するのは、必然的といってよからう。身投げして後悔の念に打ち負かされた〈自分〉は、夢の中で自らリスクを冒して動くことを断念したかのようなものである。

第八夜では、〈船員〉と同じく技術者である床屋が〈自分〉を迎える。〈自分〉は窓の外や鏡を覗き込む。〈庄太郎〉と〈女〉、〈豆腐屋〉、〈芸者〉、〈人力車〉、〈粟餅屋〉、と関心に向けていく。背後では〈帳場格子の女〉が百枚の札を延々と数えている。見たいがよく見えない、というジレンマが続き、最後に〈金魚売〉を見る

が、「動かない」。この金魚売は第四夜の〈爺さん〉と同じく、その力はまだ見せておらず、未知のままである。男女を縫うようにして市井の人々を垣間見る動きが顕著である。

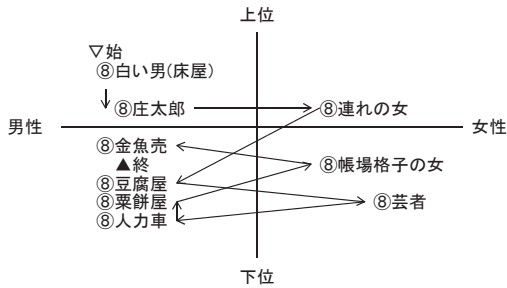


図3 第八夜の登場人物の展開

(4) 第九夜の展開

第九夜は〈若い母〉、〈子供〉、〈夫(父)〉と浪士が登場する。枠物語の外側では、〈自分〉と話をしてくれた〈母〉がいる。神仏に働きかけて夫の無事を祈る〈若い母〉と話をしてくれた〈母〉はいずれも母親の肯定的な精神性が前景に出ているので、「上位」の女性像としておく。〈父〉は少し「上位」、父を殺めた浪士たちは粗野な攻撃性をもった男性像として「下位」とみなす。

第八夜と第十夜は登場人物からすれば連続してもよさそうなものだが、第九夜が挿入される。第九夜は「世の中が何となくざわめき始めた」で始まり、裸馬や足軽共がひしめく騒然とした世間の雰囲気から始まる。これは第八夜のざわつく往来の雰囲気と連続している。この第九夜は、離ればなれになった男女の再会へのあがきというモチーフとしては、第一夜、第五夜と共通している。大きな違いは、第二夜の訳知り顔の異界の子どもではない、普通にいそうなただの子どもが登場していることである。

〈若い母〉は〈子供〉に〈夫(父)〉のことを何度も尋ねて気に病んでおり、母、子供、父三

者のイメージは何周もの円環を形成している。〈自分〉がその〈父〉はとっくに〈浪士〉に殺されていたと〈母〉から聞いて、この円環から離脱する。〈浪士〉は第五夜の〈天探女〉と同様、大切な人を死に至らしめる心的内容に根ざしている。

第九夜も、その単純さから見ると、第六夜に相当するような、モチーフの再収斂の節目とも考えられ、否定的ないし「下位」の女性像が姿を現さない点は第一夜と共通している。

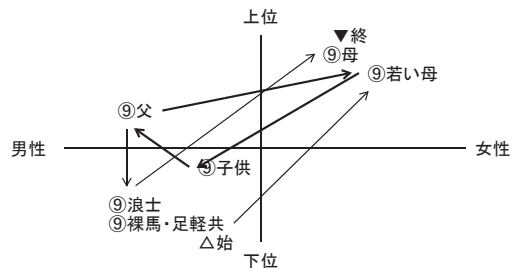


図4 第九夜の登場人物の展開
(太線は円環構造)

(5) 第十夜の展開

第十夜は『夢十夜』の集大成の観があり、登場人物も話の構造と時間的順序も複雑である。男性像は〈庄太郎〉、〈健さん〉、〈自分〉、女性像は〈往来の女〉たち、〈身分のありそうな女〉であり、人間ではないが〈豚〉も重要な登場要素である。

第十夜での〈庄太郎〉は好人物だが男性に必要な意志や欲望実現の力、危険を前にしての覚悟という点ではどこか欠けたところのある青年として描かれている。行動力や親切さを加味しても、少しだけ「上位」の男性像と位置づけるのが妥当であろう。

〈往来の女〉はイメージが不明確なので、やや「下位」に位置づけておく。〈身分のありそうな女〉は、人間の領域を越えて神話的な世界まで往復できる存在として「上位」としておく。

ただし、この女は、美しさでは他の夢に登場した「上位」の女性と共通しているとともに、〈庄太郎〉を生か死かの危機に誘う点では〈天探女〉的な面も併せ持つ、二面性をもった女性像ともいえる。ここまでの夢の女性像は「よい／わるい」の区別が比較的明確であったことからすると、第十夜の女は謎めいていつつも、女性のもつ美と危険の両面を体現した新しい女性像であるといえよう。

押し寄せてくる〈豚〉は男性とも女性ともつかないが、土に近く、欲望のイメージとしてはスピリチュアルというよりもフィジカルな、肉体的、物質的、あるいは直接的な欲望の追求にふさわしいイメージであろう。これは「下位」としてよからう。

事の経緯を語り、「だからあんまり女を見るのはよくないよ」と教訓めいた台詞をいう〈健さん〉は全体を見通している、庄太郎の行為の危険性も認識できている点では、少しだけ「上位」とみなしうる。

第十夜の登場人物の展開を図5に示した。やや「上位」の〈健さん〉が庄太郎の顛末を語る。〈庄太郎〉は〈往來の女〉を品評するだけで直接の関係には立ち入らない。そこに〈身分のありそうな女〉が現れて一番大きな水菓子の籠を買う。重い籠を持ち〈女〉についていった庄太郎は豚か崖下に身投げするかの二者択一を迫られ、力尽きて町に戻る。図では〈身分のありそうな女〉は「上位」に置いたが、先述のように、この女性には〈天探女〉的な面もあるので、「下位」の要素も併せ持っていると考えの方がよいかもしれない。これも含めるなら、第十夜はこれまでに登場した要素をほぼ網羅する夢であるとも考えられる。

そして、登場人物の展開のなかで、やや「上位」男性からはやや「下位」の女性、上位の女性から下位の〈豚〉のように、「上位」から必ず「下

位」を介して次の「上位」へと繋がる系列になっており、「上位」から「上位」への直接の連絡がないことが興味深い。

庄太郎と女との話は杵物語に入れて、外から見守るかのような〈自分〉は、全体的な視点を得たようでもあるが、これまでの夢世界から離脱して安堵しているかのようにもある。

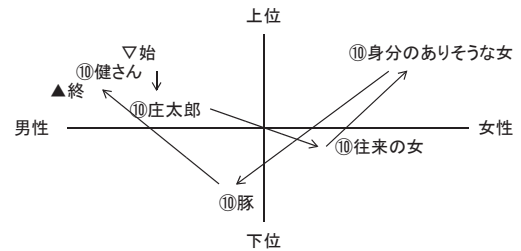


図5 第十夜の登場人物の展開

3. 夢系列の三階層モデル

ここまで概観してきた結果を踏まえて、夢系列の展開を整理すると、石井（1993）の同心円構造説、柴田（2003）の奇数・偶数系列説に加えて、次のような見方も有効だと思われる。それは、奇数・偶数系列という二層だけでなく、三層に分けて系列を見る視点である。第一夜、第五夜、第九夜はいずれも親密な男女が死別し再会を希うモチーフを扱っており、これを第一層（男女の死別）とする。

第四夜、第六夜、第八夜、第十夜は〈自分〉との直面や男女の死別というよりも、外の人々との関わりが描かれているので、これを第二層（市井の人々）とする。

第二夜、第三夜と第七夜は自分自身との直面とその苦しさが主要モチーフであり、これを第三層（自分との直面）とする。

柴田の説では、偶数番目の夢はすべて、奇数番目の夢ほどの強烈な死のモチーフはなく、「一つの行為に持続的に集中する人間」が描かれて

いる、とされていて、確かにそれも妥当であるように見える。ただし、第二夜は悟りを目指してかなり強烈な自己内省がなされ、悟るか死かという内容なので、第三層の方により近い。

複数の層にまたがる夢もある。第七夜は「自分との直面」で終わるが、船の中で様々な人々と薄い関係を持つ所は第二層の「市井の人々」にも重なっているため、第二層にもまたがっていると見なした方が自然である。また第十夜は〈自分〉ではないものの、庄太郎からすれば男女関係と死が密接に結びついていて、第一層、第三層とも無関係とは言い難い。以上を整理したのが表2である。

表2 『夢十夜』・夢系列の三階層モデル

階層	夢									
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
第一層(男女の死別)	○				○				○	△
第二層(市井の人々)			○		○	△	○		○	
第三層(自分との直面)	○	○					○			△

○…中心モチーフ、△…補助モチーフ

表の「○」は主要モチーフ、「△」は補助モチーフとして該当することを示している。第一層の夢を頂点として、第一夜からほぼ連続的に下降、上昇、下降、上昇のなめらかな曲線を描いていることがわかる。

この三層に分類する利点は、第一夜、第五夜、第九夜という類似性の高い夢を明確に分離し、特に第七夜という〈自分〉が投身する非常に際だった転機となる夢も的確に位置づけることである。

これら三層の順序のもつ意味としては、第一層は自分から最も遠いところにいる対象(女性)との取り組み、第三層が自分に最も近い所での苦闘として、第二層はその中間の距離に他者を置いて客観的に眺める場所ということがあるかもしれない。

おわりに

以上、『夢十夜』の豊富な内容からすれば、そのごく一部を描写したに過ぎないが、あえて素朴な視点から考察を試みた。

仮に『夢十夜』の夢が心理臨床事例で語られたものであったとすれば、どのような点に着目するであろうか。第一夜で〈自分〉が再会して接吻した〈百合〉には、生々しさを肉感、官能性という点では第十夜の〈豚〉と共通した性質が隠されている。第一夜において〈自分〉は部屋から庭に「降りて」、土を掘り、百年をただ待つ忍耐強い作業に耐えた点では、大地、身体、物質の領域に取り組み、一定の成果は得られたとも見えるのだが、〈百合〉の美と官能に捕らわれているとも考えられる。

第十夜の結末では〈庄太郎〉の死が予感されている。〈女〉と草原に行くことが異界への境界を越える試みとするならば、第四夜と同じく、この夢は境界を越えることに失敗した夢ともいえる。もし境界を越えることに成功したとするなら、庄太郎は何か成果を持ち帰らねばならない。それは、女との新たな経験でもよいし、新しい宝物や報酬でも、庄太郎自身の肯定的な変化でもよい。しかし、〈庄太郎〉は疲労困憊と悪夢のような経験の他は得ることなく、自慢のパナマ帽子も他人に譲り渡さざるを得ない状況に陥っている。

自分にとって異質な生の可能性を開拓し、より全体的な生き方へと開かれることを目標とするならば、夢において異質な他者として現れているミステリアスな女性たちや、生か死かを迫ってくる上位の男性たち、往来で表面的、刹那的な美に遊ぶ庄太郎的な存在とも親しみ、対話しながら関係を深めていくことで、それらを〈自分〉が生きてみる可能性を模索することになるかもしれない。

筆者にとって、優れた先人たちによって研究と考察が尽くされた観のある『夢十夜』に取り組むこと自体、「繰り返し」に陥る無謀な行為であったかもしれない。本論考に多少とも意義があることを祈るのみである。それにしても、これほどの検討に耐える「夢」をごく短期間に文章作品化して発表し得た漱石の内省・観察力と筆力に心から敬服する次第である。

参考文献

- 江藤 淳 1974/1979 神の不在と文面批評的典型, 『決定版夏目漱石』, 第八章, 新潮文庫
 石井和夫 1993 「夢十夜」の構成と主題－直線と円の饗宴－, 漱石研究, 1,p.142-147.
 Hannah, B. & von Franz, M-L. 2004 Lectures on Jung's Aion. Illinois: Chiron Publications.

- ユング, C.G. /フォン・フランツ, M.L. (野田倬訳) 1951/1990 アイオーン 人文書院
 三好典彦 2009 漱石の病と『夢十夜』 創風社出版
 中原 豊 1991 「夢十夜」の時間・試論, 語文研究, 71, p.58-68.
 夏目漱石 1908/2002 夢十夜, 『文鳥・夢十夜』 新潮文庫
 柴田勝三 生き続ける「過去」－夢十夜の表象と時間－, 批評 生の再構築 (4), 文学批評 叙説, II -06, p.193-210.
 山中哲夫 2006 漱石『夢十夜』の精神分析的解釈の試み－「第一夜」について (1), 愛知大学文学論叢, 133, 59-85.

参考 URL

- 東北大学 漱石文庫目録データベース (<http://www2.library.tohoku.ac.jp/soseki/>), 2014年4月28日更新

Abstract

The Characteristics of Dream Experience and Progressive Movement of Images in Soseki Natsume's novel "*Yume-Jyu-Ya* (Ten Nights of Dream)": Focusing on the Dreamer's Attitude and Shift of Figures and Motives

Takuji NATORI

The novel "*Yume-Jyu-Ya* (Ten Nights of Dream)" is a series of short dream stories written by Soseki Natsume in 1908. Many critiques have been made on this novel, aiming at clarifying the meaning and characteristics of each dream and the whole series of dreams. In this essay, the writer first focuses upon the last sentences of each dream and describes the subjective attitude of the dreamer (dream-ego). Two characteristic elements, the repetitive action and the active vs. passive attitude, are pointed out. Second, the writer illustrates the dynamic shifts of figures in the dreams according to two axes: the male-female axis and the upper-lower axis. These two axes are found to be useful in characterizing each dream and especially in understanding the importance of the image of upper and lower female figure. Third, the whole series of the dreams is seen to have three levels of motives: (1) Separation of man and woman by death, (2) Ordinary people in the street, and (3) Confrontation with oneself. The dream series show a progressive wave-like line moving up and down through these three levels.

Key words : Soseki Natsume, "*Yume-Jyu-Ya* (Ten Nights of Dream)," dream image, sequence analysis